

V A as B 「A を B とみなす」

regard	<input type="checkbox"/> define	■represent
consider	<input type="checkbox"/> fancy	■treat
look on[upon]	■describe	■use
think of	■look down on	■refer to
see	■look up to	
view	■propose	
take	(propose は O を C と推薦すると訳すとより良い)	

目的語に準動詞をとる動詞

目的語に不定詞をとれない動詞（動名詞を目的語にとる）

mind (～をいやがる)	stop (～することを止める)	enjoy (～を楽しむ)	suggest (～を提案する)
give up (～をあきらめる)	consider (～を熟慮する)	go on (～し続ける)	resist (～に反抗する)
avoid (～を避ける)	excuse (～をゆする)	advise (～に忠告する)	admit (～を認める)
finish (～を終わらせる)	miss (～をしそこなう)	fancy (～を想像する・好む)	escape (～を逃れる)
put off (～を延期する)	postpone (～を延期する)	practice (～を練習する)	

目的語に動名詞をとれない動詞（不定詞を目的語にとる）

manage (なんとか～する)	fear (～をためらう)	mean (～するつもりだ)	plan (～を計画する)
agree (～に賛同する)	pretend (～のふりをする)	care (～したい)	refuse (～を拒絶する)
choose (～を決める)	decide (～を決める)	desire (～したい)	offer (～を申し出る)
hope (～したい)	seek (～の努力をする)	expect (～を期待する)	learn (～するようになる)

目的語に不定詞をとるか動名詞をとるかで意味が変わる動詞

try	<ul style="list-style-type: none"> toV (～しようとする) Ving (試しに～する) 	stop	<ul style="list-style-type: none"> toV (～するために立ち止まる) Ving (～するのを止める)
remember	<ul style="list-style-type: none"> toV (忘れずに～する) Ving (～したのを覚えている) 	forget	<ul style="list-style-type: none"> toV (～するのを忘れる) Ving (～したのを忘れる)
regret	<ul style="list-style-type: none"> toV (～するのが残念だ) Ving (～したのを後悔する) 	want	<ul style="list-style-type: none"> toV (～したい) Ving (～される必要がある)
require	<ul style="list-style-type: none"> toV (～する必要がある) Ving (～される必要がある) 		

話す動詞

話す動詞 — 基本 4 動詞

自動詞	他動詞（話法で使う方）
S speak <一方的に話すイメージ> Cf; スピーカー, スピーチ speak to ~ ~に話しかける speak ill of ~ not to speak of~ so to speak speaking of~ ㊤ speak 言語 言語を話す I can't speak English. (私は英語を話せません。) T talk <双方向的に話すイメージ> Cf; 女子トーク talk about ~について話し合う = ㊤ discuss talking of~ ㊤ talk 人 into ~ing 人を説得して~させる	S say <話す内容に力点がある> 「セリフ」や「語」を目的語にとる。 say that ex; SAY YES (by CHAGE and ASKA) (Yes と(いう語を)言ってくれ) Say hello to Tom (Tom によろしく言う=Tom に'hello'と言う) It is said that ~ (~という「セリフ」を言われている) T tell <話す相手に力点がある=目的語に人をとる> tell 人 of ~ ~について人に話す to 不定詞~ } ~と人に話す that ~ } 目的語に人をとらない tell の用法=「区別する」「わかる」 { tell A from B 「A と B を見分ける」 (A と B の違いを(人)に言える=区別できる) { tell that SV ~ 「~だとわかる」

覚え方

- ①
- ②

話す動詞の応用 — say 型動詞 =話す中身に力点があるイメージ

say suggest propose explain mention
このグループの動詞は以下の形をとる。
V (to 人) that S V

覚え方=

話す動詞の応用 — tell 型動詞 =人に何かを話して聞かせるイメージ

tell	remind	convince	persuade	warn	notify	inform
このグループの動詞は以下の形をとる。						
V	<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">人</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">人</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">人</div> </div>	to V	→※inform のみこの形はとらない。			
		that(wh.) S V				
		of 名詞				

覚え方=

貸借動詞

貸す	lend	無料	第4文型 ⇔第3文型	lend 人 物 lend 物 to 人	
	lease	有料	第3文型	lease 物	car lease = カーリース (ただし[英])
	loan	有料	第4文型 ⇔第3文型	loan 人 物 loan 物 to 人	金を有利子で貸す Cf;ローン
	rent	有料	第4文型 ⇔第3文型	rent 人 物 rent 物 to 人	
借りる	owe	有料	第4文型 ⇔第3文型	owe 人 物 owe 物 to 人	
	borrow	無料	第3文型	borrow 物 (from 人)	(金銭・物品)
	use	無料	第3文型	use 物(from 人)	電話・トイレ・プールなど移動不可のものを借りる
	hire	有料	第3文型	hire 物(from 人)	車・人を雇う Cf;ハイヤー
	charter	有料	第3文型	charter 物(from 人)	バス・船・飛行機を借りる Cf;へりをチャーターする
	rent	有料	第3文型	rent 物(from 人)	rent a car = レンタカー
貸す&借りる	rent	有料	第4文型 第3文型 第3文型	rent 人 物 「人に物を貸す」 rent 物 to 人 「人に物を貸す」 rent 物(from 人) 「人から物を借りる」	

覚え方

- ① 「貸す動詞」と「借りる動詞」を区別。
⇒貸す動詞はIで始まる。借りる動詞には一切つかない。※rent はどちらの用法もある。
- ② 第4文型をとる動詞(lend と loan, owe)と第3文型をとる動詞を区別。
- ③ できれば各動詞の細かいニュアンスを知っておく(文法問題ではあまり問われない)。

「許す」動詞(許可する/赦す)

許す(許可する) : (これから)~することを許す

allow 人 to V	—が~することを許す
(-) (~)	
permit 人 to V	—が~することを許す
(-) (~)	
admit 人 to[into] 名	—が~(入る)ことを許可する
(-) (~)	
Cf; admit ~	~を事実であると認める admission 「入場料」 admission office 「AO 入試」

許す(赦す) : ~したことを許す

forgive 人 for~	~のことで人を許す (恨みを忘れる)
excuse 人 for ~	~のことで人を許す (小さなことを許す)

「願う」動詞 hope / wish

hope	他動詞	～を望む 必ず第3文型で用いる&目的語は that 節か to 不定詞だけ
		(○) I hope to see her.
		(○) I hope that she will recover. (that 節内は必ず直説法⇔wish)
		(×) I hope her recovery. (普通の名詞は目的語にとれない)
		(×) I hope a Merry Christmas. (第4文型は作れない)
	自動詞	望む (for) 普通の名詞を目的語に取りたい場合は自動詞+for の後に付ける
		(○) I hope for her recovery.
wish	他動詞	第3・4・5文型の各文型で用いる。that 節を目的語に取る場合は必ず仮定法。
		(○) I wish to see her. (to V)
		(○) I wish her to come back. (人 to V)
		(○) I wish that I were a bird. (that 節内は必ず仮定法⇔hope)
		(○) I wish a Merry Christmas. (第4文型)
		(○) I wish all the money back (第5文型)
		(○) I wish more assistance (第3文型) ※あまり使わない
※hope も wish も動名詞を目的語にとれないことに注意。		

For study

問3 次の①～④の中から、正しいものを選び。

Congratulations! I () could have attended your wedding. (青山学院・総文・2009)

①hope ②desire ③wish ④want

「疑う」動詞

suspect	that S' + V'	～ではないかと疑う (≒I think that S' + V')
	A of B	cf: サスペンスドラマ ⇒犯人ではないかと疑うドラマ
doubt	that S' + V'	～でないのではないかと疑う (≒I don't think that S' + V')
		cf: トランプゲーム「ダウト」⇒カードの番号が正しくないのではないかと疑うゲーム

「合う」動詞

fit	サイズが合っている	Cf; 「体にフィットしている」
suit	似合っている	
match	モノとモノが調和している(=go with /agree with)	Cf; 「空間にマッチしている」

「盗む」動詞

steal	他 vt.	～をこっそり盗む
The thief stole money from him. 「盗人が彼からこっそりお金を盗んだ。」		
⇒thief 名 n. (人から) 物をこっそり盗む人(盗人)		
rob	他 vt.	～から強奪する
The robber robbed the bank of its money. 「強盗が銀行からお金を強奪した。」		
robber 名 n. (人や銀行を) 襲って奪う人(強盗)		
⇒rob A of B A を襲って B を奪う		
mug	他 vt.	～を襲う
The mugger mugged him. 「路上強盗は彼を襲った。」		
⇒mugger 名 n. (人を) 路上で襲う人(路上強盗)		
burgle	他 vt.	～に押し入る
The burglar burgled the house. 「押し込み強盗はその家に押し入った。」		
⇒burglar 名 n. (建物に) 押し入る人(押し込み強盗)		

「書く」動詞

write (字や手紙)を書く

draw (線)を書く

paint (絵)を描く, 色

Original Handout

[18] 名詞構文 nominalization

名詞構文の存在意義

文を名詞句に変えて S・O・C に入りたい場合、文を準動詞の名詞用法に変えることで文を「崩す」ことができる。

Columbus discovered the new world.

S V O

(コロンブスは新大陸を発見した。)



⑤

⑥

⑦

[For Columbus to discover the new world] (不定詞)

⑤

⑥

⑦

[Columbus's discovering the new world] (動名詞)

(コロンブスが新大陸を発見したこと)

→[For Columbus to discover the new world] made the following age.

S

V

O

→[Columbus's discovering the new world] made the following age.

S

V

O

(コロンブスが新大陸を発見したことが新時代を創り上げた。)

以上のように、不定詞の名詞用法か動名詞に変えることで、文を名詞のカタマリに変えることができ、他の文の S・O・C としてはたらくことができる。実は、これよりもハイレベルな操作になるが、文を名詞のカタマリに変えるにはもう一つの方法がある。その方法とは、動詞を名詞の準動詞(半分動詞、半分名詞)ではなく、**派生語の完全な名詞に変える**ということ。

これは準動詞よりも格調高い表現になる。日本語でも「コロンブスが新大陸を発見したこと」というより「コロンブスの新大陸の発見」と言った方が堅くて知的(現代文で使われそう)な表現であるだろう。そのため、レベルの高い論文になればなるほど名詞構文が多用されている。

名詞構文は、動詞を完全な名詞にする。そのため、もちろん派生語の名詞を知らなければこの構文を使うことはできない(discover を準動詞に変えるには to discover か discovering に変えればいいが、discovery は知らなければ作れない)。

Columbus discovered the new world.

S V O

「コロンブスは新大陸を発見した。」



⑤

⑥

⑦

Columbus's **discovery** of the new world

「コロンブスの新大陸の発見」

準動詞は文を崩して「半分名詞」にしたものの、まだ「文の形を保持する」という「半分動詞」の機能を持っている(この辺の事については[α-9~14]の準動詞を参照するように)。しかし、今回は完全な名詞に変えてしまうので、当然⑤や⑦などをそのまま持ち続けることはできない。名詞が目的語などを持つことはできないからである。そこで、**周りの名詞を所有格にしたり、前置詞+名詞の形容詞句にしたりして対応する**。前置詞句にする際の前置詞は基本的に of を使う。

格関係の of

of は一般的な前置詞のように「イメージ」的な役割をするものもあるが、それとは別に「格関係」を表すはたらきもある。

of

格関係の of

- ①主格の of 後ろの名詞(の表す動作)が前の名詞に対して主格であることを示す。
the development of the city 「町が発展したこと」
Cf: The city developed.
- ②目的格の of 後ろの名詞(の表す動作)が前の名詞に対して目的格であることを示す。
the recognition of the importance 「その重要性を認知すること」
Cf: recognize the importance
- ③所有格の of 後ろの名詞が前の名詞の所有者であることを示す。
the possibility of this experimentation 「その実験の可能性」
- ④同格の of 後ろの名詞が前の名詞と同格関係であることを示す。
the city of Tokyo 「東京という都市」

of は基本的に「の」と訳せばよいと習っている生徒も多いかもしれないが、これは和訳に於いては禁忌(タブー)である。格関係の of は確かに「の」と訳せば大方読めてしまう。例えば①なら「町の発展」②なら「重要性の認知」③なら「実験の可能性」とそれぞれ意味が理解できる。しかしだからこそ、格関係を読み取ったことを表すために和訳ではきちんと区別して読まなければならない。次の例を挙げてみよう。

the help of him 「彼の救助」

これは「主格(彼が救助すること)」「目的格(彼を救助すること)」のどちらで読むべきであろうか。…答えはどちらの可能性もある。例えば、「彼の救助がなければ私は今ここにはいないだろう。」と言え「彼が私を助けた」わけだから「主格」になるし、「彼の救助は後回しにしてとりあえず犯人グループと交渉しよう。」と言え「彼を助ける」わけだから「目的格」となる。文脈次第なのである。訳を行う場合は、そこを明示して「所有格」以外の格を「の」と訳さないようにすること(ただし、却って不自然になる場合は別)。

名詞構文の和訳

名詞構文はそのまま「～の…」などと訳しても中途半端に訳してしまう点が厄介である。しかし、「～の…」訳では、①日本語が曖昧になってしまう、②名詞構文に気づいているのかが採点者に分からない、③時として日本語としておかしい文になるといったような点で、不適切と言える(③の場合は大減点の場合すら考えられる)。そこで、名詞構文を訳す際には、格関係を明らかにするように(=準動詞で訳すように)訳すようにするとよい。そうすることで①～③の全てを同時にクリアすることができる。

Columbus's **discovery** of the new world made the following age.

(△)コロンブスの新世界の発見が新時代を創りあげた。

助詞「の」が重複している(名詞構文で起きやすい現象)

(◎)コロンブスが新世界を発見したことが新時代を創りあげた。

名詞構文の基本的構造

他動詞型

S	V 他	O	
↓	↓	↓	
所有格	完全な名詞	(of 名詞)	
⑤	⑥	目的格	⑦

他動詞を名詞構文にする場合、S を所有格の形で繋ぎ、後ろに目的格の of を使った前置詞句を繋ぐことが多い。典型的な名詞構文の形である。

his raise of the tax. 「彼が税金を上げたこと」
(He raised the tax.)

自動詞型

S	V 自		
↓	↓		
所有格	完全な名詞	(of	名詞)
⑤	⑤	主格	⑤

自動詞を名詞構文にする場合、S を所有格の形で繋ぐ他に、後ろに主格の of を使った前置詞句で S を表すこともある。この場合は「自動詞が目的語をとるはずがない」という意識で気づくことができる。

the sudden rise of the tax. 「突然に税金が上昇したこと」
(The tax rose suddenly.)

また、名詞構文全般に言えることだが、動詞を修飾していた副詞の前置詞句などは名詞化で動詞が名詞に変化した後は形容詞句として修飾する(今回は副詞 suddenly が名詞化に伴って形容詞 sudden に変わっている)。

be 動詞の第 2 文型の名詞構文

形容詞の名詞形を用いることで、第 2 文型を名詞構文に変えることができる。これも自動詞の名詞構文形の一つと言えよう。

the importance of love 「愛が重要であるということ(愛の重要性)」
(Love is important.)

Original Handout

[19] 無生物主語構文

無生物主語構文とは

無生物主語構文とは端的に言えば「無生物が主語の構文」ということになるが、例えば This is a pen. のような文のことを指すわけではない。無生物を主語にして擬人法的に書いている英文のことである。

この種の英文の特徴としては訳文が擬人的(比喩的)なため、抽象的になっていることが挙げられる。

This picture always reminds me of my school days.

(この写真はいつも私に学生時代のことを思い出させる。)

これが日本語的には(意味は通じるものの)不自然で堅い(現代文でしか使わないような)ものになってしまう。写真は無生物なので何か動作をするわけではない。今回で言えば写真がなにか自分の意志で「私」に学生時代のことを思い出させているのではなく、「私」が写真を見て勝手に思い出しているに過ぎない。そこで訳文に一工夫することで、現代文的な訳を日常的な日本語に直すことができる。現代文的な日本語は極力用いないようにすると、訳としては読みやすくなるということを知っておこう。

①無生物主語の部分を「副詞的に」訳す。

(例) S のおかげで/せいで、S によって、(もし)S を…すれば

②目的語の部分を「主語的に」訳す。

③この変化に合わせて動詞を適当な形に合わせる。

今回の例文で言えば、「この写真を見れば、私はいつも学生時代のことを思い出す。」と訳すと日本語が自然になる。また、無生物主語構文を用いる英文は格調が高くなり、いわゆる難しい英文で出てくることが多い。同じように高度な表現である名詞構文と組み合わせられることが多いのも同様の理由からである。

無生物主語構文をとる動詞

無生物主語構文をとる動詞はある程度のパターンがある。丸暗記する必要まではないが、知っておくとよい。

□させる動詞(make, compel, force, oblige, cause)

This medicine will make you feel better.

(この薬を飲めば気分がよくなるでしょう。)

□許す動詞(allow, permit, enable)

The scholarship enabled her to go to college.

(奨学金のおかげで彼女は大学に行くことができた。)

□感情動詞

The news surprised me.

(そのニュースに私は驚いた。)

□bring, take, lead O to, carry

A few minute's walking brought us to the park.

(数分歩くと、私たちは公園に出た。)

□say, show, suggest, reveal, tell O of~, teach

The fact shows that the number of working women has been increasing.

(その事実によれば働く女性の数は増え続けていることが分かる。)

□give, prevent, keep, stop O from ~ing, leave O C

A little walk will give you a good appetite for breakfast.

(少し歩けば朝ごはんをおいしく食べるための食欲が出るでしょう。)

☐help O toV

The river helped the people to live.

(その川のおかげでその民族は暮らすことができた。)

☐save O₁ O₂, take O₁ O₂

The method will save us much money.

(その方法のおかげで我々は多くのお金を省くことができよう。)

Original Handout

[20] 倒置 inversion

CHART ～攻略への海図～

- ☐ 疑問文型倒置
- ☐ 情報構造型倒置
- ☐ 前置
- ☐ 外置

倒置ってなに？

英文における語順の転倒を総称して「倒置」と呼ぶ。ただし、その種類は複数あり、それぞれの特徴をきちんと把握して理解しなければならない。



疑問文型倒置

否定の副詞(only を含む)や、運動の方向や場所以外を表す副詞が強調のために文頭に出ると、後ろが疑問文の語順に倒置を起こす。この疑問文の語順は、英語において一種の詠嘆文を作っているものであり、日本語にはそれにあたる言葉がないので、訳す際は元の文と同じように訳せばよい。

☐ 否定の副詞

Never in history has the Japanese language been so confused as it is today.

文頭の否定副詞 疑問文の語順

(The Japanese language has never been so confused as it is today in history.)

Only seldom did she take part in conversation.

文頭の否定副詞 疑問文の語順

(She only seldom took part in conversation.)

☐ 運動の方向や場所以外を表す副詞

Well do I remember the sight.

文頭の副詞 疑問文の語順

(I remember the sight well.)

☐ so / neither / nor

(肯定文の後で) So do I.

(否定文の後で) Nor do I.

Neither do I.

詠嘆文

助動詞 may の慣用表現で、“May SV”の語順をとった場合、詠嘆文を作る。ただしこの詠嘆文は大変に古い用例であり、現代英語や日常会話で使うようなものではないことを覚えておかねばならない。例えば有名なものに以下の例がある。

May the Force be with you.

(フォースが共にあらんことを。)

—STAR WARS

これは映画「スターウォーズ」の象徴的なセリフの一つであるが、訳が非常に文語的なことがわかるだろう。

それはこの用例が古文的であることを示している。また、訳出が詠嘆文のようにもなっていることも注目である(日本語にそれにあたるものがないことは前述のとおりであり、受験ではせいぜい「～しますように」くらいの訳出でよい)。もう一例あげておこう。

God save the queen

(神よ、女王陛下を守りたまえ)

—English national Autumn

讃美歌のような雰囲気が特徴の、イギリス国歌のタイトルである。これは通常通りに読むと **save** が原形になっていることに不自然さを覚えるが、本来は文頭にあった **May** が省略されているのだと考えよう。今回も古風で詠嘆調の訳がつけられている。

最後に、我々がよく知っている例として、**Good-bye** という口語表現について言及する。**Good-bye** の **good** は本来は **God** のことを指している。**God** という単語をやたらに使うのは英語圏では憚られるからで、よく **Oh! My God!** という表現を **Oh my goodness!** などと言い換えているのも同じ理由である。**bye** はこれはひとつの単語ではなく、元々は **be with ye** の省略形だった。つまり書き直すと以下ようになる。

Good bye = God be with ye(=you)

(さようなら = 神のご加護があらんことを。)

よく知っている表現も実は詠嘆文(**may** の省略)だったのである。

情報構造型倒置

英語には情報構造というものがある(詳しくは別の機会で)。とりあえず簡単に言うと、文末に来るほど情報の重要度は高くなるという原則(これは基本的には日本語も同じ。オチは最後までとっておくのである)に従って、**S** が重要な語(新情報)である場合、動詞を中心として左右の位置を入れ替える。主に第1文型と第2文型で見られる。和訳は倒置の語順を考慮して、適宜行う。

□CVS

The flower is beautiful. (その花は美しい。)

Beautiful is the flower. (美しいのはその花だ。)

□MVS (M=運動の方向や場所を表す副詞)

A tall tower stood on the hill. (大きな塔が丘の上に立っている。)

On the hill stood a tall tower. (丘の上には大きな塔が立っている。)

ただし、**S** が代名詞の場合、情報の重要度は下がるので倒置は起こらない(→MSV)。

□MSV (M=運動の方向や場所を表す副詞)

It stood on the hill. (それは丘の上に立っている。)

On the hill it stood. (丘の上にはそれが立っている。)

□There 構文 「S がある」

There 構文は第1文型で、**S** を後ろに持つていくために、意味のない副詞 **there** を作り出して、それで倒置を起こしたもの。「**S がある**」と訳すが、ニュアンスは「(知らないと思うが実は)**S がある**」というもので、「その道にはコンビニがあるんですよ。」などの例では使えるが、例えば「東京には東京タワーがある。」というような例には使えない(英作文注意)。

There is a book on the desk.

(×)There is Tokyo tower in Tokyo.

前置 (fronting)

倒置のように語順が変化するのではなく、単純に要素が前に出てくるだけの「前置」という機能もある。こちらは倒置ではないので、SV の転倒は行われない。

□OSV

The man I don't know.

(その男を私は知らない。)

一瞬 the man に関係代名詞節(目的格省略)がかかっているだけに見えるが、The man に対応する V 以下がないまま文が終わっていることから、これは元の形が I don't know the man. であり、前置で前に出ているということに気付く。

□O₂SVO₁

The book he gave me.

(その本を彼は私にくれた。)

□直接話法の伝達部

“Good morning!” he said.

(「おはよう！」彼はそういった。)

外置 (extra position)

情報構造とはまた別の考えで(主に英文構造の明確化のため)、語句を本来の位置から文末へと移動する「外置」というルールがある。

The rumor is circulating [that the Prime minister was assassinated].

(首相が暗殺されたという噂が広まっている)

同格 that 節が the rumor の後ろから文末へ移動させられている。

The time will come when he will regret it.

(彼がそれを後悔するときはきっと来るだろう。)

文法問題で頻出の形。The time will come~ときたらピンと来るようにしよう。

□形式主語構文(仮主語構文)・形式目的語構文(仮目的語構文)

□SVCO

The scientific development will make possible to go to the moon.

(科学の発達は月に行くことを可能にするだろう。)

Original Handout

[21] 挿入・同格 parenthesis / apposition

《おまけ》句読法

.	ピリオド	① 文の終結 (He is Tom.) ② 略語 (ans.)
,	カンマ	① 従属節と主節の区切り ② 並列(≡and) ③ 挿入句(カンマとカンマで挟む) ④ 同格 ⑤ 関係詞の非制限用法 ⑥ 単なる句読点
;	セミコロン	① 補足説明(同形反復/反転反復) ⇒前と同じ文を違う視点(もしくは逆の視点)からもう一度説明することで補足。 ② 同格
:	コロン	① 補足説明(詳しく説明をする) ⇒前の文をよく詳しく書いて説明。 ② 引用 ③ 列挙
“ ”	引用符	① 発言などの引用(セリフ) ② 強調
—	ダッシュ	① 補足説明 ② 要約・総括
-	ハイフン	① 複合語を作る (twenty-hour-television) ② 分節を表す
‘	アポストロフィ	① 所有格 (People's happiness) ② 縮約 (I'm)
()	ブラケット, カッコ	補足説明

挿入

すでに構文的に完成されている文に、補足説明的に英文を組み込むもの。補足説明なので、訳するときには必ずしもその位置ではなく、日本語として適当な位置で適宜訳してよい。

□挿入句

カンマとカンマ(ハイフンとハイフン)で区切られた部分は基本的に挿入句だと思ってよい。

It was, **however**, impossible.

□評言節 (commented clause)

S V that 節において、本来、主節だった SV を、that 節内に投げ込むことによって、その節に対する「ことわり」や「コメント」を表す。

I always think that she is beautiful.

= She, I always think, is beautiful.
評言節

□ 評言節の as

as 節を主節に対する「ことわり」「コメント」として使うことがある。接続詞なのだが、不完全文を作る(状況の it が省略されていると考えられている)。

As is often the case with him, he was late for the class.

(彼にはよくあることだが、彼は授業に遅刻した。)

He is, as Mr. Smith has told you, a genius.

(彼はスミスさんがあなたに言ったように、天才だ。)

この構文は通常疑似関係代名詞の as として教えられるが、現在の英語学ではこれを関係詞とすることは少ない。理由としてはたつきは明らかに評言節であるということ、さらに「先行詞は文全体で、先行詞の文の前に出ることもある」という説明が不自然であることが理由である。この授業ではそれに合わせ、疑似関係代名詞で取り上げたもののみ、疑似関係代名詞の as とする。

□ if を用いた挿入句

□ if necessary	「もし必要なら」
□ if possible	「できれば」
□ if any	「たとえあるにせよ」
□ if anything	「たとえあるにせよ」
□ if ever	「たとえ～だとしても」
□ if not	「たとえ～でないにしても」

For study

問 1 次の①～④の中から、正しいものを選び。

Get your work done by tomorrow morning, (). (青山学院・2009)

① if always ② if then ③ if possible ④ if anywhere

同格

前の抽象概念や抽象名詞を詳しく説明するために、「同じ内容を別の方言で補足的に説明」したものを「同格」という。これも挿入とは方法は違うが、補足説明のはたつきをしていると言える。

□ 名詞＝名詞の同格

通常英語では名詞と名詞を連続して並列することは避けられるが、同格の目的で行われる場合、横に並べて置かれる。直接並べられる場合と、カンマやハイフン、セミコロン、コロンなどで区切られている場合もある。

We Japanese always smile whenever we talk to others. (we=Japanese)

Our teacher, John is a kind man. (our teacher=John)

□ 文＝名詞（名詞＝文）の同格

One of the most fundamental units of linguistic structure: the word

Luther publicly burned along with it a book of canon law, his act of defiance against the church that had got lost in man-made laws and used them to terrorize Christians.

□ 同格の that 節 抽象名詞＝that 節(whether 節)

抽象名詞(概念を表す名詞)を説明するために、後ろから同格の that 節を使って表すことがある。元々は SVthat 節の V を名詞化したもの。

We believe that God is there. ⇒ the belief =[that God is there]

(我々は神がいると信じている。)(神がいるという信条)

そのため、同格 that 節をとることができる名詞は決まっている。基本的に that 節をとる動詞の名詞形、もしくはその名詞の類義語(同じような単語なのでこれも使っていいだろう…ということによって使われるようになった。これ

を言語学用語では「類推」という。)

同格の that 節を後ろにとる名詞(抽象名詞)

(1)感情

assumption 「仮定」 / conviction 「確信」 / decision 「決心」 / desire 「願望」 / fear 「不安」 / anxiety 「不安」
determination 「決意」 / feeling 「気持ち」 / impression 「印象」

(2)思考

belief 「信条」 / thought 「思想」 / hope 「希望」 / idea 「考え」 / knowledge 「知識」 / notion 「見解」 /
opinion 「意見」 / view 「見解」

(3)発言・命令

argument 「議論」 / assertion 「主張」 / claim 「主張」 / comment 「意見」 / demand 「要求」 / complaint 「不平」

(4)事実・情報

fact 「事実」 / truth 「真実」 / effect 「影響」 / result 「結果」 / news 「ニュース」 / report 「報告」 / rumor 「噂」 /
information 「情報」

(5)その他

asvantage 「利点」 / agreement 「一致」 / chance 「見込み」 / conclusion 「結論」 / difference 「違い」 /
evidence 「証拠」 / exception 「例外」 / possibility 「可能性」 / principle 「原則」 / sign 「合図」

□ 同格の to 不定詞

不定詞の前に「抽象名詞」が来ている場合、後ろの不定詞がその内容を説明することがある。これも be able to V が ability to V になったように、元々不定詞を目的語にとった動詞の名詞形であることが多い。

同格の不定詞を後ろにとる名詞(抽象名詞)

attempt 「試み」 / decision 「決定」 / refusal 「拒絶」 / failure 「失敗」 / wish 「願望」 / promise 「約束」 /
intention 「意図」 / tendency 「傾向」 / plan 「計画」 / ability 「能力」 / freedom 「自由」 / reluctance 「嫌気」 /
willingness 「乗り気」 / chance opportunity 「機会」 / right 「権利」 / way method 「方法」 / effort 「努力」 /
reason 「理由」 / time 「時間」

□ 同格の of

of 句が前の名詞の同格的説明を行うことがある。格関係の of の一つ。訳出は「～という…」 「…のような～」などを行う。

the city of London
the art of painting

□ 同格の or

or が前と後ろの名詞を同じものをつないでいる場合がある。これは「～つまり…」と訳出する同格(言い換え)用法である。

He uses PC or personal computer.

(彼は PC、つまりパーソナルコンピューターを利用する。)

She has a dollar, or one hundred cents.

(彼女は 1 ドル、つまり 100 セント持っています。)

□ 同格を示す表現

厳密には同格ではないのだが、意味的に同格と同じような表現になるものを挙げておく。

<input type="checkbox"/> that is(to say)	「つまり」
<input type="checkbox"/> namely	「すなわち」
<input type="checkbox"/> in particular, particularly, especially	「特に」
<input type="checkbox"/> for example, for instance	「例えば」
<input type="checkbox"/> in other words	「言い換えれば」

□代名詞の同格に用いる表現

oneself / all/ both/ each などは代名詞につけて同格を表す。厳密に代名詞の真後ろに着ける必要はなく、これらは位置に関しては副詞的なはたらきをしているとされる。

We all are used to get up early. (we=all)

We are all used to get up early.

We are used to get up early all.

(我々全員は早起きに慣れている。)

その他の「補足説明」

同格・挿入以外に文の補足説明をしている文法をいくつか挙げておく。英文を読む際に「単語(それだけでは意味が不明瞭)⇒補足説明」の流れをつかめると読むのがスムーズになる。

□前置詞句

前の単語を前置詞句で説明する。

the initial act of kindness

(親切からくる最初の行動)

□関係詞節

関係詞節は先行詞(名詞)の補足説明になっている。同格の **that** と関係詞の **that** は同じような感覚で読めるだろう。

the place which I was born in

(私が生まれたその場所)

□分詞構文

分詞構文は動詞(V)に対する補足説明である。[α-14]参照。

Being busy, Tom didn't go shopping.

(忙しくてトムは買い物に行かなかった。)

□副詞的目的格

名詞に前置詞を付けずに、副詞的なはたらきをさせる用法。「時」「様態」「方法」「距離」「数量」を表す名詞で副詞的目的格を作る。

I am thirty years old.

(私は 30 歳です。)

I got up early today.

(私は今日早起きした。)

You did it this way.

(あなたはこのやりかたでそれをした。)

これらはどれも S・O・C・同格のどのはたらきもしていない。副詞的に補足説明をしているのである。

Original Handout

[22] 強調 emphasis

強調構文

It is[was] と that の間に語句を挟むことにより「他でもない～」という強い「限定」を表すことができる。挟んだ語句がモノの場合は that を which、ヒトの場合は who, whom に変えることもできる(when, where に変えることもできるが、好ましくない)。

It is I that killed him. 「彼を殺したのは(他でもない)この僕だ。」

→(一見疑わしい Tom でも Bob でもなく)、殺したのは他でもないこの僕だ！というイメージ。

強調構文はそれ自体が難しいわけではないが、一見形式主語構文と見分けをつけづらい。下のチャートを参考にしよう。

強調構文か形式主語構文か

It is	形容詞	that	→①形式主語構文
It is	副詞	that	→②強調構文
It is	名詞	that	{ 完全文 →③形式主語構文 不完全文 →④強調構文
		that	
It is	～	that	→⑤どちらでもない
状況の it, もしくは前の名詞を指す it			

まずは簡単な見分け方から。It is と that の間に挟まれている語句が形容詞であれば、形式主語構文、副詞であれば強調構文と即判断してよい。前置詞句や副詞節、副詞句などが大胆に挟まっている場合は強調構文だと思うと判断が早くなる。It is と that の間に挟まれている語句が名詞であった場合はどちらの可能性もあるので注意が必要。その場合は that 節以降を見て判断する。形式主語構文の that 節は接続詞 that の名詞節なので言うまでもなく完全文だが、強調構文の that は歴史的に元々は関係詞だったので、節内が不完全文になる。④のパターンはたまたま文が it is ～ that …の形になってしまったという場合。これは。なお、強調構文の that は省略されることもある。

問 1 次の文が①～④のどのパターンか判断せよ。

- (1) It is natural that your father get angry.
- (2) It was on the darkest night in winter that I met the man.
- (3) It is this plan that will bring the people
- (4) She doesn't like him. It is the fact that he doesn't know.
- (5) It was not until he came to Japan that he started to study Japanese.
- (6) It was a lucky accident that the train was late.

強調構文の疑問文

強調構文を疑問文にする場合(=疑問詞を強調している)は、疑問詞に続けて is it that ～の形になる。that 節内は平叙文の語順なので注意。また間接疑問文の場合は is it も平叙文の語順になるので注意。

Who is it that keeps renting this video?

(このビデオを借りっぱなしなのはいったい誰だ?)

Do you know **who it is that** keeps renting this video?

(このビデオを借りっぱなしなのはいったい誰なのか知っているかい?)

強調構文の訳し方

It …that 構文(強調構文、形式主語構文)の訳し方に共通しているのが、it を「それ」と訳さないこと。形式主語構文や形式目的語構文は、it の位置に that 節を入れて訳す。強調構文の場合は先ほど学んだイメージを活かして、that 節以降を訳してから、It is と that に挟まれた語句を訳すと綺麗な訳になる。

It is strange that you don't know such a basic knowledge. (形式主語構文)

(あなたがそのような基礎知識を知らないことは奇妙だ。)

It was my mother who cooked me French fries. (強調構文)

(僕にフライドポテトを作ってくれたのは、母だった。)

問1 解答

(1)① (2)② (前置詞句が入る場合は強調構文) (3)④ (4)⑤ (5)②(副詞節が入った強調構文)
(6)③

その他の強調表現

□名詞の強調

①very(まさにその)で強調を行う。

This is the **very** book that I want.

(この本はまさに私が欲しかったものだ。)

②再帰代名詞による強調

I did it **myself**.

(僕は自分自身でそれを行った。)

③同格による強調

We Japanese are now needed to rethink our education system.

(我々日本人は今や、教育システムを見つめなおす必要に迫られている。)

④強調構文

It was Tom who went to bed.

(寝たのは他でもないトムだった。)

□動詞の強調

do[does/did]を用いた強調

I **do** hope you'll get better soon.

(早く良くなりますようにお祈りしています。)

□形容詞・副詞(原級)の強調

①very, highly, extremely, terribly などでの強調を行う。

She is **very** cute.

(彼女はとてもかわいい。)

②(副詞の場合)強調構文

It was yesterday that Tom came to home.

(トムが帰ってきたのはなんと昨日だった。)

□比較級・最上級の強調

比較級… much / far / by far / a lot / lots / a great deal / a good deal / even / still / yet

最上級… very / by far / a great deal / a good deal / (形容詞のみ: much / far)

*the 最上級の前にこれらの語句を付ければ強調できるが、very のみ、
the very 最上級の形で用いる。

□疑問詞の強調

①ever, on earth, in the world を疑問詞の後に付ける。

What on earth did you use to make up your face?

(いったい全体何を使って化粧したの?)

②強調構文

Who is it that keeps renting this video?

(このビデオを借りっぱなしなのはいったい誰だ?)

□否定語句の強調

①not ～at all [in the least, by any means]

I don't know the fact **at all**.

(私は本当にその事実を知らなかったのです。)

②simply, really, just ～ not

I really don't know the fact.

(私は本当にその事実を知らなかったのです。)

□分詞構文の強調

分詞構文 as it [do] /the way S [do]

Standing as it does on a hill, the restaurant commands a fine view.

(そのように丘の上に立っているので、そのレストランはいい景色だ。)

□同一語句の反復による強調

Tom read this letter **again and again** in the train.

(トムは電車の中でその手紙を繰り返し繰り返し読んだ。)

□修辞疑問文(反語)による強調

Can we forget “PEARL HARBOR”?

(パールハーバーを忘れてもいいのでしょうか?(いや、よくない!。))

□文字の書き方などによる強調

“WHAT DID YOU SAY!?” Do you want to say it is **MY FAULT**, don't you? ”

(なんですって?それを私のせいだとでもいいたいの?)

□倒置による強調

The man I don't know.

(その男を私は知らない。)

Original Handout

[23] 否定構文 negation

否定表現がほとんど見られない日本語に対して、英語の否定表現は非常に多種多様である。そのため、意識的に否定構文について学んでおかないと、適切なニュアンスで訳出できなかったり、ひどいときには否定文だと気付くことなしに通り過ぎてしまうこともある。中学校の最初の授業から触れてきた分野と言えど、油断は禁物だ。

否定語一覧

名詞		
none(no one)	誰ひとり…ない	*単数扱い, 複数扱い共に可。
nobody	誰も…ない	
nothing	何も…ない	
neither	どちらも…ない	*単数扱い
few/little	少ししかない	
形容詞		
no	ひとつも…ない	
few/ little	ほとんど…ない	
neither	どちらの～も…でない	
副詞		
not	…ない	*ではないの否定語
no	決した…ない	*×0の否定語
never	決して…ない	
none	決して…ない	cf:none the less for[because]~
hardly	ほとんど…ない	
scarcely	ほとんど…ない	
seldom	滅多に…ない	
rarely	滅多に…ない	
neither	…のどちらも…ない	*neither A nor B
nowhere	どこにも…ない	
接続詞		
neither	…もない	
nor	…もない	
unless	…でない限り	

文否定と語否定

否定にはまず、文全体を否定する「文否定」と、特定の語・句・節のみを否定する「語否定」とがある。例えば準動詞の否定などは、文全体ではなく、句のみを否定しているので、「語否定」の代表的な例である。

He isn't a student. (文否定)
(彼は生徒ではありません。)

It's not a small risk that he is smaking. (語否定)
(彼がタバコを吸うことは少なからぬリスクがある。)

He has not a few books. (語否定)
(彼は少なからぬ本を持っている。)

not の射程

not は自分よりも右の語句しか否定できない。

She regrets not to help him with his work. (語否定)
(彼の仕事を手伝わなかったことを彼女は後悔している。)
→彼女は後悔している。

She doesn't regret to help him with his work. (文否定)
(彼の仕事を手伝ったことを彼女は後悔していない。)
→彼女は後悔していない。

not の射程がどこまであるかは文脈から判断しなければいけないことがある。

I didn't come to school because I sick in bed.
〔私が学校に来なかったのは病気だったからだ。〕
〔私が学校に来なかったのは病気だったからではない。〕

この場合、not が because 節までを否定しているかどうかで訳が 2 パターンできる。

準否定

見かけ上は否定語ではないが、その意味、昨日から not とほぼ同等に扱わなければならないものを準否定語という。その単語の行う否定を準否定といい、否定文として扱う必要がある。

準否定語

<input type="checkbox"/> few / little	(形容詞)	「ほとんど～ない」
<input type="checkbox"/> little	(副詞)	「まったく～ない」
<input type="checkbox"/> hardly / scarcely		「(程度的に)ほとんど～ない」
<input type="checkbox"/> seldom / rarely		「(頻度的に)ほとんど～ない」

little は副詞として動詞などを否定するときには「ほとんど」ではなく「まったく～ない」というニュアンスで否定語 not とほとんど同じものとして考えられる。「ほとんど～ない」という訳語を持つ副詞としては、hardly, scarcely, seldom, rarely の他に barely というものがあるが、こちらはほとんどないながらも「辛うじてある」というニュアンスなので準否定語ではないことに注意。ちなみに準否定語は否定語に近い働きをするので準否定の副詞が文頭に出ても、疑問文型倒置が起こる。

He little knows the reason why she quitted the job.
(彼女がなぜ仕事を辞めたのか、彼は全く知らなかった。)

= Little does he know the reason why she quitted the job.
疑問文型倒置

For study

問 1 次の①～④の中から、正しいものを選び。

There is () any coffee left in the pot.

①scarcely ②mostly ③almost ④usually

全体否定と部分否定

not は自分より右側の要素しか否定できないことについて扱ったが、右に極論的な表現が来ると、not が完全にその後を否定しきらず「…というわけではない」という部分的な否定になる。これを部分否定という。部分否定にしたくない場合は、極論的な語を not の射程にかからないように左側に置くと全体否定になる。

部分否定

<input type="checkbox"/> not ... all[every]	「すべて…というわけではない」
<input type="checkbox"/> not ... both	「両方…というわけではない」
<input type="checkbox"/> not ... always	「いつも…というわけではない」
<input type="checkbox"/> not ... necessarily	「必ずしも…というわけではない」
<input type="checkbox"/> not ... exactly	「正確には [本当は] …ではない」
<input type="checkbox"/> not ... quite	「全く…なわけではない」
<input type="checkbox"/> not ... altogether	「全く…なわけではない」
<input type="checkbox"/> not ... very[so]	「あまり…ない」

参考：全体否定

<input type="checkbox"/> not ... any	「何も…ない」
<input type="checkbox"/> not ... either	「どちらも…ない」

強否定

強い否定を表す表現。no 名詞, not a 名詞以外は一度どこかで扱っている。整理しておこう。

強否定表現

<input type="checkbox"/> never	「決して～ない」
<input type="checkbox"/> no 名詞	「決して～ない(どこかその逆だ)」
<input type="checkbox"/> no 比較級	「少しも～ない」
<input type="checkbox"/> not a 名詞	「一つとして～がない」
<input type="checkbox"/> little 動詞	「まったく～ない」
<input type="checkbox"/> 否定の強調	high level [α -5]参照

He is no fool.

(彼は決して愚かではない(どこか賢い)。)

Nobita can no more swim than a hammer is. cf;クジラ構文

(のび太はトンカチよりも少しもよく泳げない=トンカチが泳げないようにのび太も泳げない。)

Not a sound was heard.

(少しの物音も聞こえなかった。)

二重否定

反対の反対は肯定…という理屈で、否定語を二つ用いて、強い肯定を表す表現を二重否定という。

I **never** see this picture **without** remembering my school days.

(私は学生時代を思い出すことなしにこの写真を見ることはない=この写真を見ると私はいつも学生時代を思い出す。)

There is **no** rule **but** has some exceptions.

(例外のない規則はない。=どんな規則にも例外はある。)

疑似関係代名詞 but…必ず主格で使い、先行詞は否定語でなければならない。関係代名詞 that+not で書き換えられる。but has some exception は「例外を持たない」という意味。

Original Handout

[24] 省略構文 Elipsis

省略とは、完全な文であるために必要な語句が意味上は取り除いても問題ないために、あえて書かれないことを言う。構文をとるうえでは様々な省略が行われ、精読をする際の壁となることがあるが、きちんと原則を大切にしながら省略されたものの復元を行う必要がある。

省略構文

接続詞付分詞構文(接続詞 S+be の省略)

分詞構文では、接続詞の意味を明確にするために、分詞構文にした後も接続詞を残しておくことがある(もはやなんのための分詞構文だがわからないが)。これを「接続詞付分詞構文」と言うが、「接続詞+主節の S+be」の省略だと考えることもできる。

When eaten with salad, cold chicken is delicious.

この文の元の文は When cold chicken is eaten with salad, cold chicken is delicious. という文。通常に分詞構文にすれば Eaten with salad, ~ となるはずだが、when の意味を明確にするためにそのまま残している。これは接続詞の副詞節の中の S+be 動詞の省略と考えてもよい。主節の主語と副詞節内の主語が一致していて、動詞が be 動詞の時、S+be を省略してよい。と考える。

When (~~cold chicken is~~) eaten with salad, cold chicken is delicious.

接続詞+主節の S+be と考える場合は以下のようにルール付けができる。

when, if, while, unless, through, once などの接続詞に導かれる従属接続節の中が主節と同じ主語+be 動詞の文の場合、その主節の主語+be 動詞を省略できる。

that 節の省略

that 節をまるごと so/not で書き換えることができる。I think や I hope、および I'm afraid の後に続く否定の that 節を繰り返す代わりに not だけで表わすことができるが、I think の場合は通常は否定の not を前に出して I don't think so. と言い、think をことさらに強調するときには I think not. と言う。

- (a) 「今日の午後は雨が降ると思いますか」「いいえ、降らないと思います」
○ "Do you think it will rain this afternoon?" "No, I don't think so."
○ "Do you think it will rain this afternoon?" "No, I think not."
(so = that it will rain this afternoon / not = that it will not rain this afternoon)
- (b) 「彼女は私たちに怒っていると思いますか」「そうでないことを願うよ」
× "Do you think she is angry with us?" "I don't hope so."
○ "Do you think she is angry with us?" "I hope not."
(not = that she is not angry with us)

if any / if ever / if anything

- ☐ if any 「たとえあるにしても」 * little や few など名詞を否定する語と使用
「もしあれば」 * 文末に来ることが多い
- ☐ if ever 「たとえあるにしても」 * seldom や rarely など動詞を否定する語と使用
- ☐ if anything 「どちらかといえば」
これらの構文は if (there is) any[ever/anything]～の省略。
- ☐ if not ～ 「もしそうでないなら / ～でないにしても」
この構文は if (S is) any[ever/anything]～の省略。

その他の省略表現

助動詞の後の名詞の省略

You can go out if you can (go out). 「出られるなら出てもいいですよ。」

代不定詞

You can go out if you want to (go)

関係代名詞の目的格の省略

Country road take me home to the place (which) I belong.
(TAKE ME HOME, COUNTRY ROAD)

関係副詞の先行詞の省略

This is (the reason) why I became a teacher.

関係副詞の省略

This is the reason (why) I became a teacher.

関係代名詞+be の省略

Those (who are) present didn't know it.
Those who~ ～な人 thiose present 出席者

従属接続詞 that の省略

I think (that) he is my father. 「彼は私の父だと思う。」
接続詞 that は形式主語構文の場合と that 節が主語の時は省略不可。

比較の省略

Mary is as beautiful as her sister (is beautiful).

広告・歌詞などの省略

Train (is) Approaching. 「電車がまいります。」
Life is old there. Older than the trees Younger than the mountain.
Growing like a bleeze. (TAKE ME HOME, COUNTRY ROAD)



(エレベーターと都営地下鉄での be 動詞の省略例)